

古典乙Ⅰの年間指導計画

— 一年生の古文の計画 —

蜂 須 賀 英 治

はじめに

今年、一年生の古典乙Ⅰを担当するにあたって、年間指導計画をたてた。ここに古文の年間指導計画を記し、ご批判を仰ぎたいと思う。なお一学期に実践したことも記す。

指導目標の確認

年間指導計画をたてるにあたって、改めて古典の指導目標を確認した。指導要領の指導目標には古典乙Ⅰ古文の目標として二項目あげてある。

(1) 文化の享受や創造に資するために、古典の意義を理解させて、

古典に親しむ態度や習慣を養う。

(2) 古典としての古文を読解し、鑑賞する能力を養い、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにするとともに、読解を通して、作

品とその時代や文化との関係などがわかるようにする。

目標(1)は「文化の享受や創造に資するため」という表現に中心があると考えられる。そしてこれは、国語科総目標の(1)

生活に必要な国語の能力を高め、言語文化に対する理解を深め、批判力を伸ばし、心情を豊かにして、言語生活の向上を図る。

を受けているので、主として「言語文化」の享受や創造に資するために古典を学習させることを目標にしていると考えられる。したがって古典教育は、古典一すぐれた文章一を読解し、鑑賞することによって、生徒の教養を高め、生活を豊かにし、かつ言語生活一般の向上を図るものと考ええる。

目標(2)では、古典としての古文を読解、鑑賞する技能を伸ばし、知識を与えることや、読解、鑑賞を通して、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにすることがあげてある。

結局、古典乙Ⅰの古文の目標として、私は次の五項目をとらえた。

(1) 古典としての古文を読解し、鑑賞する技能を養い、知識を与える。

(2) 思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする。

(3) 作品と時代や文化の関係を理解し、教養を高める。

(4) 古典に親しみ、古典を読む習慣をつける。

(5) 言語生活一般の向上に役立てる。
生徒の実態

中学校学習指導要領の教材を精選する考慮すべき事項のうち、古文に関係ある部分を拾ってみると、次のようである。

第一学年 古典をわかりやすく書きかえた文章。

第二学年 短かくてやさしい文語文。

第三学年 現代語訳や注釈などをつけたり書き下したりして理解しやすくした古典。

また、学年頭初、中学校での古典学習状況を知る目的で、一年生二クラスを対象に調べてみた。作品としては源氏物語、枕草子、徒然草、平家物語等、代表的なものに接しているようである。しかし教材は現代語訳、あるいは、原文に現代語訳を付けたものが多く、授業の形式も、教師が解釈して与える形のものであったようである。こうしてみると、中学校では、古文読解の技能は、ほとんど与えられていないと考えられる。

年間指導の方針

以上の目標をふまえ、生徒の実態の上になつて、一年生の古典乙1古文の教育は、まず古文の読解力を養うことが重要だと判断した。もちろん指導要領の古典乙1内容の「A」古典としての古文に親しむ態度を養うこと」やオ「古典としての古文を読んで、もの見方、感じ方、考え方を深めるように努めること」などを無視するわけではない。同じく内容のエ「古文の基本的な語句や修辭の意味と用法を理解するとともに、現代語との相異や関係にもふれること」やキ「古文の読解に必要な文語のきまりを理解すること」に中心をおくのである。一年生で古文読解の基礎的な技能・知識を与え、二年生

で読解力を深め、三年生では古文が読める、古典が鑑賞できるというようにしたのである。

古文読解の第一歩は古語を知ることである。古語の意味、用法を知って、はじめて古文読解が可能になる。もう一つは文語のきまりの知識をつけることである。これについては、指導要領に「作品の読解に即して行なう」とある。機械的な棒暗記式の文法教育を否定し、作品の読解、鑑賞を十分に生かしながら、文語のきまり指導をして行くための指針であろう。右の二点を一年生の古文指導の中心に据えていきたいと思う。

語い指導

今までの私の古文指導では、この分野は軽く扱っていた。先の方針で述べたように、今年はこれに力を注ぎたい。古語をできるだけ多く、三年生では古文読解ができるぐらい、身につけさせたい。

一年生の初期、はじめの二小单元ぐらいいは、古文に読みなれるように、古語の口調になれるように暗誦指導する。私の今年扱っている教科書（角川書店刊、古典乙1古文I）では、第一小单元「初春の山」（自然と人生 徳富蘆花）を暗誦させたが、導入段階で、古文に慣れさせるのに効果があったようである。

次に古語には、語の発生の面からみて、和語と漢語があること、また両者の語感の相異について指導する。前述「初春の山」は、和語と漢語が適度に配合された文章であり、この指導には好適な教材と考える。

続いて、古語には、古典特有語、古今異義語があること、古文を読むにはそれらの意味・用法を理解しておかねばならないことを指導する。そのために古語辞典や古典図録類が必要であることを説明し、古語辞典の利用法を指導する。学年頭初のアンケートで古語辞

典の引き方を知っていると答えたものが一〇七名中七二名もいた。しかし実際にひかせてみると、誤って他の語の意味を出したり、また目的の語が見出せなかったりすることが多かった。第三小单元「九月二十日のころ」（徒然草三十二段）は下段に現代語訳が付しであり、原文と対照させて、どうしてそういう訳が出てくるのか、古語の意味や用法のは握に好適である。古語辞典のひき方で特に注意したいことは、

- (1) 見出しは歴史的かなづかいであること。
- (2) 活用語は基本形があげてあること。
- (3) 活用語は見出しの下に活用の種類が略語で記してあること。
- (4) 多義語は語源に近いものから、番号を付して並べてあること。
- (5) 付録を利用すること。
- (6) 「総記」を一度読んでおくこと。

以上のような入門期の指導のあと、新しい単元に入る前に、教材の中の重要な語をプリントし、家庭学習として、辞書をひいて、語意を調べてこさせるようにした。プリントしたのは、まだ生徒が一語一語のは握ができないからであり、また何か形に示さないと、家庭学習をしてこないからである。普通のノートを用いて、語、品詞、活用の種類、意味を書いてくるよう指示した。また下段に空欄を残しておき、類義語、対義語などの必要事項を書かせるようにした。多義語は意味を全部書いてくるよう指示し、文脈の中ではどの意味が最適であるか、授業の中で考えさせるようにした。類義語、対義語、同音異義語、語源、語の構成、音韻の変化、現代語との関連、慣用句など、いろいろな要素をとらえて、できるだけ理解しや

すく、できるだけ語意を覚えやすく、できるだけ古語に関心をもたせるようにする。例をあげてみる。

イ類義語

○いみじ（今昔）いたく いと いとど きはめて

こよなく はなはだ ゆゆし

○そこら（竹取）あまた おほし こだた

ロ対義語

○おほやけ（今昔） わたくし

○まかる（竹取） まゐる

ハ同音異義語

○痴る（今昔） 知る

○往ぬ（ ） 寝ぬ

ニ語の構成

○おぼつかなし（徒然）

「おぼ」は「はつきりしない」意の接頭語「おぼろげ」

「おぼろ」など類義語

○おとなふ（徒然）

「なふ」は四段動詞をつくる接尾語 あがなふ、うべなふ、

あきなふ、つみなふ、いぎなふ、ともなふ

ホ音韻変化

○装束（竹取） しやうぞく↓さうぞく

下衆、験者、障子、紙燭、修行者、宿世、出家、受領

○案内（今昔） あんない↓あない

顕証、親族、対面、本意、日記

へ現代語との関連

○あへて(今昔) とりあえず

○みゆ(今昔) いわゆる、あらゆる

ト慣用句

○音に聞く(竹取) 音もせず

○さりぬべき(平家) さりげなし

ヲ語源

○わびし(徒然) 動詞「わぶ」

○にほひ(徒然) 「に」は「丹」で赤土、赤色。したがって「にほひ」は、嗅覚的なものでなく、視覚的美をいう。

リ語のニュアンス

○をかし(徒然) あはれなり

○おこなふ 個人的に何かするのではなく、一定の法式に従って、儀式をとり行なう。

又古典常識

○髪上げ(竹取)

産養、袴着、裳着、髪上、元服、初冠

○黒糸織(平家) 糸織、皮織、緋織、卯花織、萌黄織

単語帳は、時折提出させ、継続しているかどうか調べたり、不備はないか調べる。また単語の豆テストをできるだけ多くする。

文語のきまり指導

一年生の古文指導で、もう一つの重要な点は、「文語のきまり」の指導である。以前行なわれていた時間特設の文法指導は今日ではほとんど姿を消したようである。私も今までの文法指導を反省し、次のような方針で指導して行きたいと思う。

1 時間の特設はしない。

2、古文の読解指導と「文語のきまり」指導を平行させ、できるだけ機能的に指導する。

3、ある期間を限り、「動詞」「形容詞」「助動詞」「助詞」というように重点的に指導する。

4、適当な時期に、既習の事項をまとめて整理する。

また、一年生での「文語のきまり」指導の範囲を次のように定めた。

1、文語又の特質について。

2、歴史のかなづかいについて。

3、文章、文、文節、単語などことばの単位について。

4、品詞は助詞の一部を除いて、十品詞全部について。

5、係り結びについて。

6、読解する上に重要だと思われる箇所の語句のかかり受けについて。

7、語の成分の省略について。

8、文や段落の内容をとらえ、主題や要旨のはてをすることにいて。

9、修辭法について。

以下、角川書店刊古典乙Ⅰ古文Ⅰをテキストとして、一学期間の実践をまじえながら、年間指導の計画を述べてみる。

(1) 初春の山

文語文の特質を口語文と比較して指導した。ことばの単位については、中学校でも学習しており、今後の指導にもたちまち必要だと考えられたので、最初の単元で取り扱った。

(2) 学者のまづかたきふしを問ふこと

歴史的かなづかひの指導をした。「あいうえお」五十音を板書させ、かなの種類を確認させた上で、現代かなづかひと違うかなの主なものをあげた。「い、ゐ、ひ」「え、へ、ゑ」「お、を、ほ」

「は、わ」「ず、づ」「ち、じ」など。その後本文中から歴史的かなづかひの部分を取り出させ、確認させた。なお、かなづかひの違いによって、意味が違ってくる例をあげ、かなづかひの重要さを理解させた。「たへて」「たえて」、「いる」「ゐる」、「いらふ」「いろふ」など。

また、この文章は、わずか五文で成っており、論理的な文章なので、一文一文内容をは握し、要旨をとらえる練習をさせた。

(3) 九月二十日のころ

品詞論に入って動詞の指導をした。古文では主語の省略が多く、述語をとらえて主語を推察せねばならないこと、古語辞典を利用する際に活用語の見出しは終止形であることなどの理由で、動詞の指導から始めた。活用の方(活用形)それによる分類(活用の種類)を中心にした。(ここでは四段、下二、サ変、ラ変、上二)。文論に関しては、古文では主語の省略が多く、述語の表現のし方で主語が判断できることを本文の例で示した。

また、作者の言いたいことが表わされているのはどの文か考えさせ、段落、主題、要旨などの用語について説明した。

(4) 鈴鹿山において蜂盗人を刺し殺しし話

副詞が多く出てくるので、副詞の指導をした。副詞の機能、副詞の種類を指導し、本文中の副詞のかかり受けを確認させた。動詞では力変の指導をし、名詞の指導をした。文の切れ続きについては、

一文だけ接続助詞「に」で、二主題を含ませた文があったので、二文に切って内容をとらえさせた。なお説話文体として、「今は昔」語り伝へたるとや」の形や、漢語、仏教語が多いことをあげ、当時の新文体であること、後の和漢混交文の先駆をなしていることを話した。

(5) 百人一首

修辭法の指導をした。枕詞、序詞、掛詞、縁語について、テキストの歌の用例をとり出し、それぞれの形や用い方を指導した。他の用例を引くことはやめ、筆力を養うのは他の機会に回した。また一首一首の歌の中で、文のは握の練習をさせた。

第一單元「古文入門」が終った所で、動詞の活用の種類の残り上二、ナ変、下一を指導し、全体のまとめをした。

(6) 竹取物語

形容詞、形容動詞の指導をした。先に機能や活用のし方を説明し、本文中から形容詞、形容動詞をめき出させた。文章論の関係では「今は昔」の説話形式、冒頭の脚韻をふんだ表現、同語反復による強調表現、対句形式、会話の前後の同語反復など古い説話の語り口について説明した。

(7) 平家物語

二学期に入り、この教材から、助動詞、助詞を扱う。各小單元に多く出てくる助動詞、助詞をとらえていく。文体については和漢混交文であること、七五調、対句の多い流麗な文章であることを平曲と関連づけて指導する。修辭法では、係り結びや比喻法にふれる。「橋合戦」の戦場場面では、感動詞やくり返し表現、用言の音便形、擬声語、擬態語について指導する。「忠度の都落ち」は敬語表

現を中心にする。

(8) 徒然草

助動詞、助詞の指導を続ける。および語句の接続関係の指導をする。特に徒然草は、一段、一段、段落、主題をおさえていく。主題のある部分を指摘し、文章の四形式、頭括、尾括、双括、列挙について指導する。

(9) 俳句

季語、切れ字、字余り、字足らず、省略、比喩法の指導をする。短詩形であるので特に文脈に注意させる。

おわりに

以上のような計画で一年生の指導をしていきたい。必要事項を一つ一つ理解させ、記憶させるため、いろいろな方法をとりたい。反復練習も重要であろう。なお二年生では、語句のかり受けの指導を中心におく予定である。今年度三学期中旬ごろから計画をたて、三年間系統的な指導してみたい。

(広島県立向原高等学校教諭)